

『うつほ物語』の女一宮論―皇女の婚姻の意味するもの―

勝 亦 志 織

論文要旨

『うつほ物語』における大宮と女一宮はいずれも臣下に降嫁する。大宮が物語史では珍しい后腹第一皇女の降嫁であったのに対し、女一宮は父帝鍾愛の皇女であることが重要視された。女一宮の後腹ではないという負の面は、おそらく父帝鍾愛であるということと彼女に后腹とは別の価値が見出されていると考えられ、父帝鍾愛という偶図は後続の物語に引き継がれる。従来、あまり問われることなかった本物語の皇女降嫁は物語史上において意味のあるものであり、本論では二人の皇女降嫁を見ることで、物語が実際の歴史に對抗するかたちで皇女降嫁を利用し、多くの皇女の婚姻を描いたことを考察した。そして、そこには父帝の裁可であることが大きな意味をもつことを指摘した。特に二人の降嫁は兼雅の妻である嵯峨院の女三宮やその他大勢の源氏や皇女の降嫁とは位相を異にし、帝の裁可が皇女の夫や子女たちに「天皇家」にとって必要な価値あるもの

いうことを示すことになった。

キーワード 『うつほ物語』、第一皇女、皇女の婚姻、「女一宮」、「大宮」

はじめに

平安時代における長編物語である『うつほ物語』には多くの皇女が登場する。「琴」をめぐる音楽物語のかたわら、主要人物の母や妻の多くが皇女であり、それはつまり、各代の帝が皇女を多く持っていたことになる。例えば、俊蔭の母は嵯峨院と兄妹である「女源氏」であった。源正頼の妻の一人は嵯峨院の女一宮（大宮）であり、藤原兼雅の妻の一人も嵯峨院の女三宮である。また、藤原仲忠の妻も朱雀院の女一宮である。帝別にみると、嵯峨院には少なくとも四人の皇女（大宮・女二宮・女三宮（兼雅室）・小宮）が、朱雀院に

も四人の皇女（女一宮～女四宮）がいることが確認できる。

その上にまた、系譜のわからない「女源氏」も登場し、源氏となつた人物も含めると多数の皇女が登場し、その大半が婚姻によって様々な系譜とつながるのである。これほどまでに皇女が登場し、物語の中で必要な存在とされるのは、平安から鎌倉時代までの物語史上でも非常に珍しいことである。

物語は、清原俊隆にはじまる琴の一族は別にして、嵯峨院等を中心とした「天皇家」^①と、正頼を中心とした源氏、忠雅・兼雅・仲忠らを中心とする藤原氏の三者により成り立っており、そこに皇女が媒介として存在することは不思議ではない。しかし、『うつほ物語』より後の物語では皇女の婚姻はむしろ禁止されていた。『うつほ物語』に続く『源氏物語』は落葉の宮や女三宮降嫁について、一条御息所や朱雀院がしきりに皇女は結婚しないほうがよいと説いていた。^②その説明は確固たるものであり、この二つの物語の中にある差異はどこから来るのであろうか。

もちろん、歴史的な影響もあるだろう。しかし、現存する作り物語のうち、『源氏物語』に先行する『うつほ物語』が、なぜここまです多くの皇女が登場させ、また臣下と婚姻を結んだのか。皇女の問題を全て単に物語成立時点の影響と片付けるわけにはいかない。本稿では物語史の観点から、特に二人の「女一宮」（大宮と朱雀帝女一宮）に限定して考察していきたい。

一、后腹皇女の婚姻

—大宮と正頼の婚姻—

『うつほ物語』における皇女の降嫁のうち、后腹であるかどうか、という点に注目してみると、『源氏物語』以降の物語があまり描くことのなかった后腹皇女の降嫁がはつきりと描かれていることに気づく。その筆頭が正頼の妻である大宮である。

昔、藤原の君と聞こゆる、一世の源氏おはしましけり。童より、名高くて、顔かたち・心魂・身の才、人にすぐれ、学問に心入れて、遊びの道にも入り立ち給へる時に、見る人、「なほ、かしき君なり。帝となり給ひ、国領り給はましかば、天の下豊かなりぬべき君なり」と、世界挙りて申す時に、よろづの上達部・親王たち、「婿に取らむ」と思ほす中に、時の太政大臣の、一人娘に、御冠し給ふ夜、婿取りて、限りなく労はりて、住ませ奉り給ふほどに、時の帝の御妹、女一の皇女と聞こゆる、后腹におはします、父帝、母后にのたまふ、「この源氏、ただ今の見る目よりも、行く先なり出でぬべき人なり。わが娘、この人に取らせてむ」とのたまひて、婿取り給ふ。（藤原の君・六十七）^③

后腹の皇女、それも第一内親王が源氏である正頼に父帝裁可のもと降嫁^④する。さらに、母后の所有していた広大な三条の宮に正頼の

もう一人の妻である大殿の君（太政大臣の娘）もろともに住むことになる。屋敷の伝領については、この物語の多くがそうであるように母方からの伝領であり、この三条の宮が、今後の正頼一族の繁栄の基盤となる。

なぜ物語の始発に、后腹の第一皇女が降嫁する必要があるのだろうか。例えば『源氏物語』の今上帝女一宮を考えれば、后腹の第一皇女は懸想の対象とはなっても、密通はおろか婚姻に発展することはなかった⁽⁵⁾。その後の平安後期物語にしても、后腹の第一皇女が降嫁するのは、『狭衣物語』の一条院の女一宮（一品宮）⁽⁶⁾だけであり、この婚姻は狭衣との噂から成立した特殊なパターンである。つまり、平安時代の物語において后腹の第一皇女と確認できる皇女が臣下に降嫁した例は、この大宮だけなのである。

この大宮と正頼の婚姻によって何が生まれたのか、それは「天皇家」と源氏の強い結びつきであり、物語の政治体制は源氏優勢で進む。源氏の一族は正頼の兄季明を筆頭として、数多く登場する。その中でも、正頼は自身の婚姻関係によって、「天皇家」と藤原氏双方とつながっている。それだけが源氏（特に正頼）台頭の要因とは言いい切れないが、しかし、物語の初めは藤原氏が太政大臣であり、その娘が朱雀院の後の宮でもあり、摂関政治の観点から物語を読めば、太政大臣の息子である忠雅や兼雅が後の宮と連携しながら、父の後を次いでいてもおかしくない状況である。それにもかかわらず、物語は父帝裁可のもとに后腹の女一宮を降嫁させる。

物語における源氏・藤原氏の勢力分布を考えると、藤原氏の太政大臣をそのままにしながら（なお、この人物については早い段階で故人となったと推定され、その後、太政大臣は関官であった）も、源氏の左大臣を登場させ、物語が進行すると源季明を左大臣、藤原氏の忠雅を右大臣にする。その後、「沖つ白波」巻の除目で季明は太政大臣、忠雅は左大臣、正頼は左大将兼右大臣となる。源氏と藤原氏では、藤原氏の太政大臣亡き後、源氏の側の昇進が優勢であり、そうした面は物語後半においても見られる⁽⁸⁾。政治や後宮政策では、藤原氏よりも源氏が優勢であり、その結果が除目や官位に反映されていることになろう。

しかしながら、正頼の官位が大宮との婚姻によって格段にあがったかというところでもなさそうである。婚姻時の官位は不明だが、大君である仁寿殿の女御が三十一歳⁽⁹⁾の段階で、左大将兼大納言である。後に、朱雀院が自身の女一宮を中将であった仲忠に降嫁させようとするとき、今は身分が低いけれど、若いのだから問題ない、と降嫁をしる仁寿殿の女御を説得するが、そうした状況と同様のことを想像することは難くない。その後の昇進は先ほど述べた通り、同時期に大将であった兼雅より一歩リードする形で進んでいく。

では、この大宮の降嫁が正頼に何をもたらしたのであろうか。それは、未来の政治を任せるべき人物であることを「帝」が認めた、ということである。もちろん、先学の指摘通り、「帝」となり給ひ、国領り給はましかば、天の下豊かなりぬべき君なり」と、世界挙り

て申す」という世論を抑えるための意味もあろう。^⑩だが、それならば、皇女降嫁という手段ではなくても良いはずだ。先の引用にある、嵯峨院の「この源氏、ただ今の見る目よりも、行く先なり出でぬべき人なり。」という言葉は実際に物語が証明しているが、何よりも、物語の後半、正頼と仲忠が「世をば、左大臣、仲忠の朝臣となむまつりごつべき」（国譲・下、七五二）と、皇女を妻とした二人が同等の政治能力を持った人物として規定されることで、父帝裁可の皇女降嫁の意味が改めて問い直されることになる。

正頼と仲忠の差異をどこに求めるのか、また、降嫁した皇女が后腹か否かという問題は、朱雀院女一宮を詳細に見た後に、もう一度考察することとして、朱雀院女一宮の仲忠への降嫁の様相を見て行きたい。

二、父帝鍾愛の皇女の婚姻

—朱雀院女一宮と仲忠の婚姻—

前節では、嵯峨院皇女の大宮を考察してきたが、本節では朱雀院と仁寿殿の女御の娘である女一宮に焦点を当てる。朱雀院には仁寿殿の女御以外にも後の宮との間に姫宮（女三宮）^⑪がおり、后腹の皇女という点ではこの後の宮腹の女三宮が該当する。しかし、朱雀院にとって鍾愛の皇女であるのが、仁寿殿の女御腹の女一宮である。

女一宮の登場は、「藤原の君」巻において正頼邸に住んでいることとの紹介から始まる。正頼と大宮の住む三条の宮に、仁寿殿の女御

の子女たちは住んでおり、母方の里邸にて養育されていることがわかる。具体的に登場するのは仲忠との降嫁の話が全面に押し出されてきてからだが、それ以前にも「今宮」として主に正頼の娘であるあて宮とセットで登場する。

①ここは、大將殿。あて宮・今宮、物参る。（藤原の君、九十五）
②今宮、

七夕の会ふ夜と聞くを天の川浮かべる星の名にこそありければあて宮、

七夕の会ふ夜の露を秋ごとにわがすすの玉と見るかな

など、これかれ御琴遊ばしなどするを、（中略）ここは、河原に、御髪洗ましたり。あて宮琴の御琴、今宮箏の御琴、御息所琵琶、大宮大和琴調べ給へり。（藤原の君、一〇六）

③よろづ面白き夕暮れに、八の君、今宮、姫宮、御簾巻上げて、出でおはしまして、例の、御琴ども弾き合はせて遊び給ふを聞きて、（嵯峨の院、一六五）

④仲頼、「いかにせむ」と思ひ惑ふに、今宮ともろともに、母宮の御方へおはする御後ろ手、姿つき、譬へむ方なし。（嵯峨の院、一九二）

⑤月の面白き夜、今宮・あて宮、簾のもとに出で給ひて、琵琶・箏の琴、面白き手を遊ばし、月見給ひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、「調べより始め、違ふ所なく、わが弾く手と等しく」と聞くに、静心なし。（祭の使、二三五）

⑥（嵯峨院後の宮の六十賀において）後の宮、女一の宮より始め奉りて、大將殿の君たちに、御琴弾かせ奉り給ふ。（菊の宴、三一八）

いずれの引用も、あて宮と共にすごしている場面であり、特に共に合奏する場面が四箇所見える。姉妹のようにあて宮と過す様は、場面としては多くはないが確かに描かれているのである。加えて、例えば「春日詣」巻の春日詣でや、「菊の宴」巻の難波での上巳の祓には女一宮の参加は確認できず、一方、嵯峨院の後の宮の六十賀については、「御装ひ、大宮、女一の宮、今宮までは、赤色に葡萄染めの重ねの織物、唐の御衣、綾の裳。若宮は、十一、同じ赤色の織物の五重襲の上の御衣、白き綾の上の袴。」（菊の宴、三二四）と、そこにいたはずのあて宮の描写はなく、大宮・女一宮（今宮）、女二宮（若宮）といった皇女たちの衣装が特化して述べられている。このように丁寧にと、藤原氏の女であるあて宮と皇女である女一宮は描き分けもなされているのである。

従来、女一宮の存在は〈吹上の宣旨〉以降、仲忠への降嫁、いぬ宮出産と、琴の一族の後継者を生むための存在として、物語中盤になつてから急にクローズアップされたと考えられてきた。^①女一宮の存在はヒロインあて宮の陰に隠れ、ストーリー展開上の要請によってその意味を与えられたのだという。しかし、細かな描写を追うと、常にあて宮とともにいた女一宮が、あて宮求婚譚終焉後の物語においてもう一人のヒロインとして登場することは、何ら不思議ではな

い。「内侍のかみ」巻以降のことさらな女一宮格上げは、むしろ視点の変更によるものであり、正頼及びあて宮の求婚者たちの視点からは、あて宮を超えられなかった女一宮も、朱雀院側からの視点で見れば、今までの状態からの格上げを期したのではなく、あくまでも父帝鍾愛が強調された皇女の描写といえないだろうか。^②以下、「内侍のかみ」巻以降に見える、女一宮の描写を確認してみたい。

①その今宮をやは取らせ給はぬ。天下に言ふとも、えまさることあらじ。あやしく、見るに心行く心地して、世間のこと忘るる人になむある。（内侍のかみ、三七九）

②おとど、「上も、と思ほして、御心とどめて、物のたまふにこそあめれ。うるさき人の幸ひなりや。同じき皇女たちと聞こゆる中にも、心殊に思ほしたりつるを。源氏の中将も、殊に劣らぬ人にしも。かたちも才も、官爵も同じごと。ただ、勢ひなるのみなむ、思ふにはあらぬ。すべて、女子の多かるは、すべきことぞ多かるや。…」（沖つ白波、四四六）

③かくて、一の宮もさまこそ君も、御かたちもし給ふわざも、あて宮に殊に劣り給はず。（沖つ白波、四五二）

④上、「この皇女を、久しく見ぬかな。いかが生ひなりにたらむ。かの人と着き並びたらむには、よに似げなうは見えざりしを」。御いらへ、「人は、いかが見奉るらむ。まことなるにや、御髪も、御覽せしよりは、桂に多くあまり侍り、おほかたも、見る効なくはものし給はず」。上、「さて、二の皇女は」。女御、「君に似

給ひて、それも殊に劣り給はず。ふくらかに、気近きこと添ひてなむ」。上、「なほ、所榮せ、女子生ほし立てらるる所なれば、この皇女たちも、ほのかには似ずかし。さらば、平らかにて。思ふやうにて、御子を、あまた、平かに持給へる肖物は、そこにもけしうはあらじかし」とのたまへば、まかで給ひぬ。(蔵開・上、四七二)

⑤女御の君、中のおとどに渡り給ひて、見奉り給ひて、「いたくぞ面瘦せ給ひにける。上の、さばかり後ろめたがり聞こえ給ふものを」とて見奉り給ふに、面白く盛りなる桜の、朝露に濡れ合へたる色合ひにて、御髪は、瑩しかけたるごととして、隙なく揺り懸かりて、玉光るやうに見え給ふ。御衣は、赤らかなる唐綾の桂の御衣一襲奉りて、御脇息に押しかかりておはす。(蔵開・上、四七二～四七三)

⑥女御の君、「何か、さらずとも、心もとなからぬ御髪なれば」。尚侍のおとど、「髪は、多く長き、あまたあるべしや。筋・有様こそ難けれ。これは、ありがたくぞ」などて、掻い分けつつ見奉り給ふ。艶やかにめでたし。殊に損はれ給はず。少し青み給へれど、いと貴に気高く、さすがに匂ひやかにおはします。

(蔵開・上、四八一～四八二)

仲忠への降嫁から、いぬ宮の出産までの女一宮の描写である。①が朱雀院、②が正頼、(③は地の文)、④⑤が仁寿殿の女御、⑥が俊蔭女からの視点による描写を取り上げた。「内侍のかみ」巻にお

ける朱雀院の女一宮降嫁の話から、このような女一宮の詳細な描写が多くなるのだが、この時点で実際にその姿を見た上での記述は母である仁寿殿の女御と、いぬ宮の出産に立ち会った俊蔭女だけである。それでも、なお朱雀院によって鍾愛の皇女であることが繰り返されているのは、この女一宮が朱雀院にとって最初の娘であること、そして、女一宮の母である仁寿殿の女御は正頼の大君であり、女一宮は「天皇家」と正頼一族を結ぶ駒の一つであり、双方の「家」にとって婚姻政策上重要な女性であるからとも読める。

「天皇家」と正頼一族を結ぶ存在であるということは、次のような描写からもわかる。

①(女一宮降嫁の話を帝が仁寿殿の女御に話して)御息所、「今、よく思ひ給へ定めてを。里になど許し申されば」。上、「その御里こそ、よにそしり給はざらめ。さては頼もしかなり」など聞こえ給ふ。(内侍のかみ、三八〇)

②「内裏より、日を取りて、下し賜はせて、責めさせ給ふことをば、はかなき私事にて破るべきにてあらず」とて、一の宮の住み給ひし中のおとどに、造り磨き、御座所をしつらはれたること、綾・緋どもして飾り、候ふべき人、皆、髪長く、かたち・心は定められて、八月十三日に婿取り給ふ。(中略)十五夜の夜、三日にあたるに、その夜、内裏より、大將殿に「その婿たち率て参れ」とあり。(沖つ白波、四四七～四四八)

③「さて、奉らずや。かの持給へる人は、正頼が子にて養ひ奉

るぞかし。見奉り給ふに、効なくは、よにも」(国譲・中、六八六)

④北の方(俊蔭女)「いでや。宮は、いとめでたくおはするものを。さるかたち族にて、皇女たちにさへおはすれば、色合ひ・御髪筋などは、いかでかは。また、さるは見ぬ。かの限りはこそ、飽き給へらずなりにしかば、いかでか、参りて見奉らむ」。(蔵開・下、六〇〇)

①は女一宮の降嫁が、仁寿殿の女御の里、つまり正頼の許可が必要だということを示している。②は女一宮の降嫁が、正頼邸に「婿取る」形で進められ、その準備を全て正頼が行なっている。③は、明確に「正頼が子」であることが示される。④は兼雅と俊蔭女と仲忠が会話する中に、女一宮が正頼の一族であり、その一族は皆、美人であることが述べられている。

以上のことをかかんみると、女一宮は皇女ではあっても仁寿殿女御の実家である正頼邸に住み、正頼一族の中に数えられていることになる。『うつほ物語』において、正頼の孫に当る皇子・皇女は皆、正頼邸で育てられていると思われる。その上、なかなか父帝と会う機会を持たなかったことも、朱雀院が女一宮や女二宮にしきりに会いたいと希望する場面からも理解される。

確かに、史上のみならず物語においても、皇子・皇女が里方で育つことは『源氏物語』の今上帝女一宮や匂宮の例を思い出せば不思議ではない。しかし、その婚姻について、朱雀院が外祖父の意向を

気にするのはなぜだろうか。それは、女一宮の降嫁の相手が仲忠という琴の一族の流れをくむ人物であるからに相違あるまい。外祖父だからという理由以上に、仲忠の相手として女一宮を降嫁させることの是非を朱雀院や仁寿殿の女御が気にしているのだと、ここでは考えたい。

事実、正頼は、仲忠にはあて宮にも劣らないとされるさま宮と婚姻させようと思っていた。それが、朱雀院の「なほさまこそは涼の朝臣にもせられよ。仲忠はわれ思ふことなむある。涼にと思へど族の源氏なり。同じくは仲忠をとなむ思ふ」(内侍のかみ、三八四)という発言により、さま宮との婚姻は涼に変更せざるを得なくなつた。この段階での朱雀院の発言は具体的に女一宮を出すことなく、「思ふこと」があるという程度だが、それでも正頼は「『それもこの筋は離れじ』とこそ思ほゆれ」(内侍のかみ、三八五)と、仁寿殿の女御腹の皇女が想定されていることは承知している。

そうした描写を追えば、皇女を降嫁させることよりも、仲忠を婿にすることに對して、朱雀院・正頼双方が問題としている様相が見え、だからこそ、朱雀院が仁寿殿の女御に「その御里こそ、よにそしり給はざらめ。」と、正頼こそ仲忠を「うつほ育ち」と誇ることはなく、むしろ自分の婿としたいほど仲忠を高く評価しているだろうと念押しするのである。ここでは、朱雀院も正頼も琴の一族とのつながりを持つことを、自身の娘との婚姻という形で求めているのである。琴の一族とつながることが、政治と直結するかどうかとい

う問題もあるが、仲忠が正頼同様に今後の政治を担う存在であり、彼の最大の美質である「琴の一族」へのあこがれを朱雀院も正頼も断念することができないのであろう。正頼は、大宮の発言の中で「娘一人取らせて、子出で来ば、琴継いでもせさせむ」（沖つ白波・四四六）と考えていることがわかり、朱雀院は孫にあたるいぬ宮への秘琴伝授を聞き、「いとうれしく、一の宮の御もとに、この手のとまるこそ本意叶ふ心地すれ。」（楼の上・上、八五七）と述べている。⁽¹³⁾

一方、帝にとって最初の娘であった女一宮が重要な存在であったことは、物語の後半、女一宮の宮の君出産に際し、仁寿殿の女御が以下のように発言することからもわかる。

「あまたおはすれど、この宮をば、小さくより、上の、限りなく愛しきものにし給ひて、『宝持ちたる心地こそすれ』とのたまひつつ、『年ごろ、見ぬこと』と思ほし嘆きて、迎へ奉り給ひしにも、参り給はざりしを、『いとくちをし』と思ほしたりしものを、『今一度見せ奉らずなりぬるにやあらむ』と思へば、いみじう悲しくなむ。この宮により奉りてこそ、おのれをも、人とも思したれ。片時も見奉らでは、いかがはあらむ」と泣き惑ひ給ふ。（国譲・下、八一〇）

傍線部にある通り、第一皇子を出産できず、自身の皇子の立坊を望めなかった仁寿殿の女御にとって、帝の最初の皇女を産んだということが一つの矜持であり、帝が女御を寵愛する理由でもあった。

帝鍾愛の皇女ということが、女御腹の皇女であつても朱雀院にとって意味のある皇女となりえていることが、この仁寿殿の女御の言葉からもわかる。朱雀院の皇女は何人もいるが、帝が鍾愛しているということが女一宮の存在意義の一つであり、こうしたあり方が、ひいては『源氏物語』の柏木による朱雀院鍾愛の皇女である女三宮への強烈な思慕と密通へとつながると考えられる。

また、同じく「国譲・下」巻において、朱雀院の後の宮が、自分の生んだ姫宮（女三宮）の降嫁を持ち出し、兼雅の娘である梨壺の生んだ皇子の立坊に協力するよう忠雅らに進言する。⁽¹⁴⁾「国譲・下」巻での後の宮の立坊争いにおける役割は注目すべきものであるが、ここでも「皇女」が政治の駒として利用される様子がわかる。特に、朱雀院の女三宮は后腹であり、本来的には女御腹の女一宮よりも重要視される皇女である。その後腹の皇女を母后自らが正頼の娘たちに対抗して自分の兄弟たちに降嫁させようと言い出すことは、それだけ后腹の皇女が価値ある存在だと自負していることがわかる。

つまり、『うつほ物語』における皇女は、政治上の婚姻政策の重要な存在であり、それは一代の帝だけの問題ではなく、次代の帝の問題でもあるのだ。だが、同じような皇女降嫁であつても、朱雀院による女一宮降嫁と後の宮による女三宮降嫁では、その志向する先が異なる。朱雀院は琴の一族とのつながりのため、後の宮は摂関体制を補完するために降嫁を利用しようとしたのである。

さて、女一宮をあて宮に劣らない存在として描きだそうとするこ

とについて、それは視点の相違だと先述した。それは同時に、物語の流れの変化でもある。「俊蔭」巻より始まり、「藤原の君」巻で正頼一族が紹介され、以後、「あて宮」巻まであて宮求婚譚が展開される。あて宮求婚譚における「天皇家」の存在は薄く、最後に東宮があて宮を得ることになったのも、「吹上・下」巻における帝の神泉苑での紅葉賀の際の宣旨を大幅に無視した方向で決まる。これが、結局は〈吹上の宣旨〉をめぐる作品上の大きな解釈の別れ道となるのだが、朱雀院と東宮の間における問題は、帝の宣旨にそむくことを恐れる正頼に対し、東宮の「何か、そは。罪あらば、奏せさすばかりにこそはあなれ。な思しわづらひそ」。(菊の宴、三〇二)という強引な一言によって、あて宮入内が決定の方向に向かう。

そうした、東宮は登場しつつも正頼一族を中心とした世界に対し、「内侍のかみ」巻以降は今後待ち受ける立坊争いの問題をはらむこともあり、「帝」を中心とした世界へと移行する。室城秀之氏は「内侍のかみ」巻の朱雀院の有様を「ことばの主宰者としての帝」であると述べておられるが、言葉のみならずその場の空間を支配する朱雀院の台頭をもう少し肯定的に捉えても間違いではあるまい。仁寿殿女御との会話をはじめ、仁寿殿女御と兼雅、梅壺女御と兵部卿宮の恋を語る朱雀院の姿は、朱雀院後宮のある意味非常に安定した様子を映し出す。朱雀院が二人の女御の密通めいた恋を語っても、それは戯れにすぎない。「帝」の戯れが何の現実味も持たず戯れのままに終わり、むしろ、その戯れは後宮内が秩序立った体制であるか

らこそ可能となるのである。

それは、俊蔭女に対する内侍督任官も同様である。兼雅の妻である俊蔭女に彈琴の禄としてではあるが内侍督に任命し、「私の后」と公言することが可能であるのも、朱雀院後宮はすでに女性たちの勢力争いが終わり、俊蔭女の参入程度では揺るがない状況であったことを示してはいないだろうか。東宮の後宮に比べ、朱雀院後宮は非常に安定し、かつ安定しているからこそ様々な朱雀院の戯れが可能となる空間なのである。朱雀院の後宮を中心とした世界の展開は、物語に新しい一面を呼び起こすことになっているのではないだろうか。

『うつは物語』における、琴をめぐる俊蔭系の世界と、あて宮求婚譚を中心とする正頼系の世界が並存することは自明のことだが、そこには深く「天皇家」の問題が関連してくることが「皇女」や「后」を見ていくことでも明らかになるのである。さらには、物語を導く存在として、帝のみならず后・女御たちが動きまわる様相は、物語に俊蔭系・正頼系と同様に天皇を中心とする後宮が一つのストーリー展開上の軸を形成しているといえよう。

三、降嫁後の女一宮

—あて宮・女二宮・いぬ宮との関係から—

さて、本節では話を女一宮に戻し、降嫁後の女一宮についてみて

いきたい。「蔵開・上」巻以降、特に顕著に現れるのが、あて宮による女一宮賞賛である。このあて宮による女一宮賞賛も、結果的には女一宮の格上げとなるわけだが、それもあて宮が入内し不自由な立場に立たされたからに他ならない。

〔女一宮は〕なかなか、いとよしや。よに心憎く思ひたる人に
つき給ひて、一所、心安く。おのれこそ、かかる大集りに出だ
し放たれて、よには憂くまがまがしきことを聞き、見給ふ人は、
殊にはなやかにも見え給はず。…」（蔵開・上、五二二）

このようなあて宮の述懐は何度か繰り返され、その最たるものが、
「楼の上・下」巻にある。

あて宮、いみじうねたううらやましう思したるに、一の宮お
はせぬをぞ、少し、うれしう思す。藤壺に、大殿参り給へる、
あて宮、「一の宮、何ごとを思すらむ。女皇子おはせましかば、
うらやましからまし」と聞こえ給へば、うち笑ひたまひて、「春
宮のおはしますよりほかに、うらやましきことと思すべき。…」

（楼の上・下、八八七）

女一宮へのあて宮の意識は複雑である。女一宮が仲忠の琴を聴く
ことができることについて、かねてよりうらやましく感じていたあ
て宮が、秘琴伝授にいたっては女一宮が伝授の場に行かないことを傍
線部のように「少しうれしう」思うほどになっている。ここでは、
もはやあて宮の言葉は女一宮を賞賛する余裕を持ち得ない。正頼が
いくら「春宮がいる」＝国母であることの幸いを述べても、あて宮

には響かないのである。

しかし、今上帝の愛を独占するかたちで立坊から立后へと進むあ
て宮は、物語の流れから考えれば最も幸福な女性であるはずだ。中
世へと続く物語史の流れにおいて、自身の皇子の立坊、自身の立后
は女性の最大級の榮譽であり、多くの物語が薄幸の女性が入内し后
女院となる道程を描くのに対し、この『うつほ物語』のあて宮が降
嫁した女性を羨むという構図は興味深い。「后」と「皇女」の問題は、
母娘関係で問題にすることが多いが、こうした同年代の女性による
対応関係は今後見直していく必要があるだろう。

一方、女一宮は直接あて宮に対するよりも、むしろ、仲忠を介す
るかたちをとることが見受けられる。あて宮とはいぬ宮出産の後、
正頼邸に退出してきたあて宮と対面するなど、姉妹のような関係は
大きく変化しない。しかし、次の引用場面などのように、仲忠のあ
て宮に対する態度に女一宮は反応を示す。

（あて宮からの文を見て）宮、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、
「何ごとならむ。見給へばや」と聞こえ給ふ。「あらずや」と
て見せ給はず。手を擦る擦る聞こえ取りて見るに、心魂惑ひて、
いとをかしと思ふこと昔に劣らず、思ひ入りて物も言はず。宮、
「をかし」と思ほして、御返り聞こえ給ふ、「日ごろは、げに、
おぼつかなきまでなりにけることをなむ。いでや、筑波嶺は、
『陰あれども』となむ見ゆる」とて、

峰高み夢にもかくはしら雲を今も谷なる物とこそ見れ

と聞こえ給ふ。(沖つ白波・四五二)

この場面は降嫁直後であるが、このように女一宮はあて宮からの手紙を見た仲忠の反応を「をかし」と思い、二重傍線部の『陰あれども』とは古今和歌集の「筑波嶺のこのもかのもとに陰はあれど君が御蔭にます蔭はなし」が引歌として、あて宮に仲忠は今でもあなた以上の方はないと思っているのだと伝えている。女一宮が仲忠があて宮の求婚者であったことを認識していたことがわかる場面であるが、だからこそ、その後の仲忠は「あて宮ではなく女一宮のことを大切にしている」ということを示していくことになる。

(いぬ宮の出産に立ち会った典侍が「三条殿の北の方ぞ一、藤壺二、宮三にこそおはすめれ」と言った言葉に対して) 中納言、宮に、「いみじうも、物言ふものかな。わいても、里人を褒むるぞ、空目なる。藤壺の御方まで給はば、必ず見せ給へ。『典侍の言ひつること、まことか』と、見比べ奉らむ」。宮、「まことぞ、いとよく物言ふ姥。この君は、見るままによくなりまさり、我は、日々にあやしくぞなるや。昔だに、こよなかりけり」。中納言、「さも、いみじき御方端にもあるかな。見なしにやあらむ、御前をも、『いと恐ろしげにおはす』とは見奉らぬを。さなることは、必ず見せ奉らせ給へ」。宮、「いで、そこ、ただにはあらじ。こと引き出でて騒がれば、聞きにくからむ」。君、「よし」と見奉るとも、今は、何ごとにか。昔だに、引き出でずなりにしことを。上達部の御娘の、許し給はぬことを、

しひて、取りも、いかにもしたる人をば、朝廷は何の罪にか当て給ふ。また、殿も、仲忠を殺し給はでやみ給はずはこそあらまし。それ、琴一声掻い弾きて聞かせ奉らまし。憎みも果て給はざらまし。さりし時だに、過たずなりにしものを。いとよく、さりぬべき折も、ありしかば、帝の御娘も賜はらずやありける。宮、「それは、わが人にもあらねば、御子の数にも思さで、『ただに捨つ』とこそは思しけめ。昔は、鬼にもこそは賜ひけれ。ただ人なれど、この君は、親の、さばかり思ひかしづき給ひしを、天下に思ふとも、何わざかせまし」。『そは、傾き娘をこそ、かかることし給ひけれ。さらば、ただ捨てられ給へるなり。さても、心ざし浅きにはあらざなり。捨てさせ給ふ好む鼠もあなり。』(蔵開・上、五〇九)

長い引用となったが、あて宮と降嫁に対する女一宮と仲忠の意見が表れている箇所である。「あて宮を見たい」とする仲忠に、「あて宮は昔から自分より優っていたから、見たらあなたは何もせずにはむはざない」と女一宮は述べる。それを受けて、仲忠は「昔も何も事を起こさなかつたのだから、帝の娘、女一宮を得た今は何も起こすはずがない」と弁明する(二重傍線部)。

ここで、注目したいのは傍線部にあるように、女一宮が自身の降嫁は父帝に「ただに捨つ」と思われたからであり、一方、あて宮を「ただ人」ではあるが、親が大切にしていたと述べる点である。こ

ここでは仲忠との会話での言葉であるから、これを簡単に女一宮の本心と取ることはできないが、女一宮の自己認識の中に、皇女の自分と「ただ人」のあて宮の差異があることがわかる。また、仲忠は自己卑下の女一宮の言葉を逆手にとって女一宮を大切にしていることを示す。このような仲忠と女一宮の掛け合いは、この場面にとどまらないが、「国譲・上」巻におけるあて宮と女一宮の対面場面では、仲忠への女一宮の「皇女」ぶりを示し圧巻である。

あて宮と対面する女一宮のもとを仲忠は女一宮の迎えとして訪れる。二人が琴を合奏するのを立ち聞きたり、文を何度も届けたり、さらには「宿直しよう」と言い出す仲忠に、「あな見苦しや。狭き所に。いぬのもとに往ね」と女一宮は告げる。それ以前から女一宮の仲忠への言葉に敬語がないことは指摘されているが、女一宮の仲忠への態度が、あて宮がそばにいることでより強い態度に変容しているといえようか。あて宮・女一宮・仲忠の三人の関係がこのように示されることは、あて宮と女一宮の差異を強調することにつながるが、その後、女一宮がつれない態度を取ったことについて仲忠が恨んだことが「国譲・中」巻になって明かされる。

御方、「宮との御仲は、いかがある」と。典侍、「いかばかりめでたき仲ぞ。そは、先つ頃、こなたにおはしけるに、参りけれど、物聞こえ給はざりければ、五日六日、入り臥し給ひてこそは恨み奉り給ひしか。」（国譲・中、六九六）

いぬ宮誕生の折にも登場した典侍が、ここではあて宮の今上帝第

四皇子出産の折にも参上して、あて宮の問いに答えている。そして、女一宮があて宮のもとから帰った後に、仲忠が五日も六日も御帳台に入り臥して恨み言を述べたことが明かされる。この典侍によって、仲忠にはあて宮の美しさが、あて宮には仲忠・女一宮夫妻の仲がそれぞれ伝わるのだから、一つ前の引用部の中で「まことぞ、いよく物言ふ姥。」と女一宮が述べたのは的を得ていることになる。この典侍の存在自体も注目すべきであるが、このように女一宮を中心にして仲忠とあて宮がそれぞれ意識しあっていることがわかるのである。

さて、一方、あて宮について直接何かを思考したり発言したりはあまりしない女一宮であるが、妹である女二宮について、非常に能動的に行動することがおこる。女二宮については、「国譲・上」巻で仁寿殿の女御と大宮が、祐澄・近澄・五の宮が女二宮に懸想し、その略奪を狙っていることが述べられるが、その計画は「国譲・下」巻において現実化する。女一宮の宮の君出産が難産で「人々、騒ぎで、静心あらじ」と考えた祐澄・近澄、一方、五の宮は「かしこの人、多く騒ぎ居たらむ。この折は、盗み出でむ」と考え、いずれも日が暮れるのを待った中、女一宮は次のような行動を取る。

女御の君より始めて、宮に懸かり奉り給ひて惑ひ給ふに、二の宮は、何心もなく、西の方に、人少なにておはす。一の宮、まかで給ひし夜の事を聞き給ひにしかば、さるいみじき御心にも、「二の宮に、『おはして、我を見給へよ』と聞こえよ」

とのたまへば、さ聞こゆ。宮の御方々を恥ぢ聞こえ給ひて、惑ひて、泣く泣く入り給へり。「こち寄り給へ。わがもと、な退き給ひそ」とて据ゑる奉り給へるに、心知りたる人々は、いみじく泣く。(国譲・下、八〇九)

つまり、女一宮は女二宮が盗まれるのを察知して、仁寿殿の女御をはじめ大宮・俊蔭女・民部卿の北の方・大殿の北の方など多くの人々が近くに居り、また簀子には左右大臣、その子どもたちや読経の使いなどの男性が多く並ぶという、絶対に安全な自分のそばに呼んだのである。

宮の君出産は予定より遅れ難産となり、仲忠はもちろんのこと仁寿殿の女御や俊蔭女が泣き惑い、臥しまろぶほどの騒ぎであり、大宮や正頼がようやくだめているほどであった。その中で、最も冷静に女二宮のことを考え行動した女一宮は皇女という枠を越えて突出した存在ともいえるだろう。このように、妹の身を守るというような行動をとる皇女は他の物語には管見の限り見えない。二児の母となろうとしている女一宮が、女二宮に対しても母のように守ろうとしているといえようか。では、実子であるいぬ宮にたいして、女一宮はどのような存在であるか、次に見てみたい。

女一宮といぬ宮は、仲忠が異常なほどにいぬ宮養育に力をいれており、女一宮は養育そのものには興味を示さない。ただ、皇女のみならず当時の貴族の子どもの養育は通常は乳母が行なうものであり、いぬ宮への態度は一般的に考えて母性を疑うほどのものではない。

い。むしろ、ここではいぬ宮が女一宮の娘であることの意義を考えたい。秘琴伝授が終わり、楼の上のクライマックスである秘琴披露の際のいぬ宮は次のように描写される。

左のおとど、几帳に添ひて、はつかに、いぬ宮の御様体を見給ふに、いみじくうつくしげにめでたう見え給ふこと、あて宮の稚児におはせしにこよなうまさり給ひて、貴になまめかしう、見驚くばかりいみじきものかな、ここばくの君たち、一、二の宮ばかりこそは、品まさりて見え給ひしかど、まだ小さきほどに、いとかうは見え給はざりき。これは、ゆゆしく、変化の者と見え給ふ。(楼の上・下、九二三)

左のおとど(正頼)の視点から見たいぬ宮の描写である。いぬ宮については、誕生直後より仲忠が厳しく他人の目に触れることを禁じており、母方の曾祖父母である正頼や大宮も同様であった。その正頼から、いぬ宮は傍線部にあるように、あて宮よりも優り、二重傍線部にあるように、皇女である女一宮や女二宮よりも品あることが述べられる。だからこそ「変化の者」とまで言われるのだが、物語内で最大の美女であるあて宮よりも、そのあて宮と優るとも劣らない存在とされた母である女一宮よりも美しく品のあるいぬ宮は、あて宮・女一宮世代を超越した存在となる。

これは、いぬ宮が、父方から琴の一族と藤原氏の血を、母方から「天皇家」と源氏の血を受け継ぐ、稀有な存在だからに相違ない。その一方で同じ血をひく宮の君が物語のなかで主要な位置を与えられな

いという問題はあるが、しかし、いぬ宮の存在の大きさは秘琴伝授において決定的になり、父仲忠、母女一宮を位階の面からも格上げさせることになる。

いぬ宮や俊蔭女による秘琴披露により、俊蔭女は正二位に、女一宮は四品になり、仲忠には大臣の宣旨が下りそうになるが、それを俊蔭に贈位の中納言が、京極邸に冠を賜うこととなる。物語のクライマックスに、女一宮が何を感じ、どう動いたのか、物語はほとんど語らないが、ここで女一宮は降嫁した身でありながらも四品に叙されるのである。

なぜ、女一宮が「四品」なのか。『うつほ物語』では、叙位される皇女はこの女一宮だけであり、その比較対象はいない。加えて、叙位の際に「男にならずらへて」とあり、内親王に対する叙位が特殊であることも表明されている。『源氏物語』以降の物語に「一品」に叙された宮が登場してくることの差は大きい。もちろん、『源氏物語』以降の物語では一品はいずれも未婚の内親王に対するものであり、降嫁した内親王には、『源氏物語』の朱雀院女三宮に対する二品が限界であったのも事実である。しかし、このように皇女に対する叙位あるいは昇叙が今後の物語において利用されていくことの先例となる可能性はあっただろう。そして、いずれ入内するであろういぬ宮に対しても、母宮の位階が上がるのが何らかの影響を及ぼすことも想定できるかもしれない。

以上、あて宮・女二宮・いぬ宮と女一宮の関係を論じてきた。そ

れぞれ立場の違う三人との関係であり、そこに何か統一した見解が見えるわけではないが、女一宮の様々な側面は見ることでできたのではないだろうか。

終わりに

后腹の第一皇女であった大宮と、女御腹であっても父帝鍾愛の皇女であった女一宮。いずれも臣下に降嫁し、摂関政治的な物語内の政治体制の中に組み込まれていく。大宮が多くの子女をもうけ、朱雀院・今上帝の二人に娘を入内させたのに対し、女一宮はいぬ宮一人が多く的美質を荷って、おそらくはあて宮腹の東宮への入内につながる。二人の政治的な意味合いでの差異はほとんどなく、女一宮の後腹ではないという負の面は、おそらく父帝鍾愛であるということと彼女に別の価値が見出されていると考えられ、朱雀院の娘であっても正頼邸に仲忠が婿取られることや、女一宮を「正頼が子」とする記述からは、女一宮が朱雀院・正頼の二人にとって仲忠を婿取るための重要な女性であったことがわかる。そして、何よりも最大の差異はいぬ宮という存在を生んだということであろうか。

女一宮の生んだいぬ宮が、物語において最も美しい女性として造型されていることは先ほども述べたが、物語に登場するおよそ全ての血筋を引き継いだいぬ宮の入内は、「天皇家」における血統の統合につながる。物語はそこまです描きえず、「楼の上・下」巻での

大団円で終了するわけだが、そこでも、女一宮の存在は無視されていない。『うつほ物語』において皇女が物語の初めから終わりまで必要とされていることはいえるのではないだろうか。

しかし、それにしても『うつほ物語』はなぜこれほどまで皇女を必要としたのだろうか。多くの皇女が登場するということは、その存在が多様になるのは当然のことである。しかも、単に内親王だけではなく、源氏となった者もいる。例えば平安時代初期の史上の天皇との比較は容易である。桓武天皇の皇女のうち三人は、平城・嵯峨・淳和の各天皇に入内した。自身の血を引く三人の帝に同じく自身の血を引く皇女を入内させることで、桓武皇統の安定化を期したものであり、三人の皇女はいずれも、何らかの付加価値を持った人物ではあった。¹⁸⁾しかし、この皇女を入内させる形式は古代的な流れであり、桓武帝独自の意味合いは薄い。

そして、その後の皇女の入内は減り、臣下への降嫁の初例は嵯峨帝の皇女、源潔姫が藤原良房に降嫁したものである。その後、醍醐帝に至り、十七名を越える皇女のうち、六名に婚姻が確認できる。そのうち十六番目の皇女である中宮穩子腹の康子内親王が藤原師輔に降嫁した話は『大鏡』などを通して有名であるが、康子内親王の降嫁時には父帝はすでに死去した後の出来事であり、物語の大宮や女一宮の姿を重ねることは難しい。次いで村上帝の時代では、十人を越える皇女のうち、降嫁が確認できる皇女は数例である。それ以降の帝は皇子女の数が激減するため、皇女の降嫁は見えなくなる（入

内した例はある）。

以上、史上には物語のように父帝が在位中に后腹の皇女や鍾愛の皇女の降嫁を許した例はほとんど見られないのである。もちろん、ある程度は成立の背景を確認する必要もあり、例えば桓武帝や醍醐帝のような平安初期の後宮の様子が物語に反映されている可能性もある。しかし、『うつほ物語』の主要な皇女の降嫁は父帝の裁可の上で成立しており、『うつほ物語』はむしろそうした歴史上の降嫁の例に対抗した形で成立しているともいえる。

『うつほ物語』の大宮と女一宮の降嫁は「婿取る」と表され、それは皇女の婚姻相手が「天皇家」によって婿として待遇されることを意味しよう。そこには兼雅の妻である嵯峨院の女三宮をはじめとする、その他大勢の源氏や皇女の降嫁とは位相を異にする。物語中には、源氏や藤原氏などの他氏の血統に、何人もの皇女が降嫁し子女をもうけていることが確認できるが、それらに比べ、大宮・女一宮の降嫁は別格である。物語のヒロインあて宮も嵯峨院の皇女である大宮の娘であることが一つの価値であるし、いぬ宮も同様である。「婿取った」帝側の問題のみならず、「皇女」の子どもであることが意味を持つのである。

一方、多くの皇女が登場しながらも、皇女のみが与えられる「斎王」という役割を与えられた者は主要人物におらず、嵯峨院の皇女である斎宮が帰京したという事実のみが描かれるだけである。しかし、逆に斎王が描かれないことで、物語が必要とする皇女は父帝裁

可によって降嫁する皇女であり、その栄華であることが如実に示されることにもなる。

以上、『うつほ物語』における皇女像の一例として、大宮と女一宮を提示した。二人の女二宮は父帝が降嫁を決めるということの意味を持ち、自身の夫や子女たちが「天皇家」にとって必要な価値あるものであることを示した。嵯峨院の降嫁した皇女のうち、大宮以外はみな不幸せとなり、朱雀院の皇女のうち、降嫁したのは女一宮一人という物語状況は、しかし、後の物語に引き継がれない。むしろ、政治の駒としての意味合いが平安後期物語では利用されていくことになるのだが、その点については、『源氏物語』における女一宮像も含め、今後の課題としたい。

(1) 『うつほ物語』でいう「天皇家」は嵯峨・朱雀・今上・東宮と続く天皇の系譜に付随する皇・皇子・皇女を含むこととする。

(2) 『源氏物語』での記述は以下の通り。(引用は小学館 新編日本古典文学全集による。)

朱雀院

・「皇女たちは、独りおはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心寄せたてまつり、何ごとにつけても御後見したまふ人あるは頼もしげなり。」(若菜・上④二九)

・「皇女たちの世づきたるありさまは、あはあはしきやうにもあり、また高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、悔しげなることも、めざましき思ひもおのづからうちまじるわがなめれと、(中略) 昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく下れる際のすき者どもに名

を立ちあざむかれて、亡き親の面を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば、みな同じことなり。(若菜・上④三二―三三三)とある。

一条御息所

・「皇女たちは、おぼろけのことならで、あしくもよくも、かやうに世づきたまふことは、心にくからぬことなりと、古めき心には思ひはべりしを、いづ方にもよらず、中空にうき御宿世なりければ、何かは、かかるついでに煙にも紛れたまひなむは、この御身のための人聞きなどはことに口惜しかるまじけれど、さりとて、しかしよくかえ思ひ静まじう、悲しう見たてまつりはべるに」(柏木④三三〇―三三二)

以上のように、皇女は結婚しないほうがいいとする考えが示される。ただし、朱雀院は「いにしへの例を聞きはべるにも、世をたもつ盛りの皇女にだに、人を選びて、さるさまのことはしたまへるたぐひ多かりけり。」(若菜・上④四八)とも言い、皇女降嫁の前例があることを示し、一方では一条御息所の言葉の中には皇女降嫁を厭うのを「古めき心」とするように、皇女降嫁の認識が物語内で揺れている。それは登場人物相互の関連性からくる矛盾といえ、皇女降嫁に対する認識を『源氏物語』のみで把握しようとするこれまでの研究のあり方には問題があり、先行する『うつほ物語』を考察することは重要な作業である。なお、『うつほ物語』、『源氏物語』、『狭衣物語』の女一宮について考察した、一文字昭子「平安時代の女一宮―史実と物語」(『うつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』から)、『国文目白』三十七号、一九九八年二月)では、『うつほ物語』成立当時は降嫁の風潮が進み、第一内親王を降嫁させるという設定以外に登場人物の優遇を際立たせることができなかった」とするが、それでは『うつほ物語』固有の問題は見えてこない。また、氏の論考は歴史事象に重きが置かれており、その点において本論とは視座を異にする。

(3) 『うつほ物語』の引用は、室城秀之校注『うつほ物語 全 改訂版』(お

- (4) うふう、平成十三年)による。
- (4) 『うつほ物語』では、皇女たちの結婚を描く場合、ここでの引用にあるように「婿取る」とする。「降嫁」という概念とされる可能性も考えられるが、他の物語との比較の都合上、本論では「降嫁」と記述する。
- (5) 『源氏物語』に登場する后腹の第一皇女は、桐壺院の女一宮と今上帝の女一宮がいる。桐壺院の女一宮はほとんど物語に登場しないが、今上帝の女一宮は続編に登場し、薫と匂宮に思慕を寄せられるも、正編の藤壺の宮や女三宮のように密通されることはない。
- (6) もちろん、后腹の女一宮（第一皇女）が降嫁する物語は中世になると、物語引用あるいは享受といったあり方で利用され発展する。その典型例には『恋路ゆかしき大将』などがある。
- (7) 「国譲・下」巻において描かれる立坊争いでは、後の宮が藤原氏の血を引く皇子を率坊させようと、忠雅、兼雅らを説得しようとする場面が描かれる。可能性として、常に潜在していた藤原氏摂関体制を後の宮が領導しようとした場面といえよう。
- (8) 「蔵開・中」巻において、兼雅が官位についての不満を次のように述べる箇所がある。
- 「大臣、関の侍らざらむには、いかでかは。」父おとど「なかは、その関のなからむ。この頃こそ、かく金釘のように固まりためれ。そこを御婿にして、中納言になさると空けられし関には、親とてあるおのれをこそなされましか。仁寿殿を思して、その親を引き越してなされたるは、さるべきことかは。おのづから、右のおとど参り給ひて、心に任せて給ひてむ。(蔵開・中、五六八)
- (9) ここでは、仁寿殿をはじめとする正頼の娘たちが問題とされているが、正頼の昇進が自身より早いことについての不満が述べられている。
- (10) ここでの仁寿殿の女御の年齢は物語内での異同があり、いささか不審であるが、いずれにしても仁寿殿の女御が成人し数多くの皇子・皇女を産む程度の年齢は重ねている頃と捉える。
- (10) 室城秀之「あて宮東宮入内決定の論理—うつほ物語の表現と論理」(『国語と国文学』一九八一年十月、後『うつほ物語の表現と論理』若草書房、一九九六に所収)では、「帝の側から見れば、そのような人望を集めている正頼を婿として取り込むことによって、皇位継承に関する世の批判を封じる必要があったと、想像をたくましくすることもできるだろう。」とする。
- (11) 坂本信道「仲忠あて宮・女一宮—『うつほ物語』栄華の方法と論理—」(『女子大国文』第百十三号、平成五年六月)、大井田晴彦「仲忠と藤壺の明暗—「蔵開」の主題と方法—」(『うつほ物語の世界』二〇〇二年、風間書房)また、例えば新編全集の頭注の解説文では「これまで人物像に言及されることのなかった女一の宮が、求婚譚後の物語世界を担う仲忠の結婚相手として、あて宮に匹敵する存在に語り直されようとしている。」(内侍のかみ②一六五)とする。
- (12) 事実、吹上の宣旨によって、仲忠と女一宮との降嫁が決まった後、仲澄は仲忠に向かって次のように述べている。「かの人(女一宮)は、ただ今の世の一にて、内裏にもここにも、雲居より降りたるよりも、殊に思ひ聞こえ給ふ人を。」(『菊の宴、三〇八』)女一宮の存在が、あて宮求婚譚の背後にありながらも「ただ今の世の一」と称されるだけの存在であったことがわかる。
- (13) なお、この朱雀院の言辞について、西山登喜「『うつほ物語』擦り寄る朱雀帝と仲忠—笑いを媒介に—」(『物語研究』第八号、二〇〇八年三月)において「朱雀帝は精神的にも現実的にも(琴)を懐柔し掌握したと認識する」とする。
- (14) この後の宮の計略については、大井田晴彦氏が「『国譲』の主題と方法—仲忠を軸として—」(『うつほ物語の世界』二〇〇二年、風間書房)において、「正頼の婚姻政策を模したものであることは明らかだ」とする。確かに自身の娘との婚姻によって相手を味方に引き入れようという意思は共通するが、やはり、ここも「皇女」であることの意味を考察する必要はあろう。
- (15) 〈吹上の宣旨〉については、早く「内侍のかみ」巻の成立の問題によつ

て議論されてきた。その詳細は、室城秀之「作られた過去」(「内侍のかみ」の巻における「吹上の宣旨」をめぐる)、「国語と国文学」平成三年十一月。後、『うつは物語の表現と論理』(若草書房、一九九六年)に所収)に詳しく、室城氏は宣旨を「作られた過去」として、「内侍のかみ」巻において故意に作られたとする。

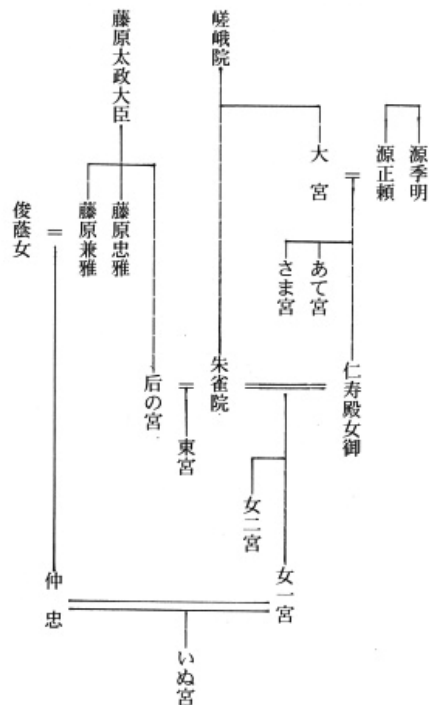
(16) 室城秀之『うつは物語の表現と論理』(若草書房、一九九六)の第一章の8、「内侍のかみ」の巻の表現―その会話をめぐって―において指摘されている。

(17) 女一宮の母性については西山登喜『うつは物語』宮の君登場の理由―女一宮の「母性」を問う―(「物語研究」第七号、二〇〇七年三月)に詳しい。

(18) 平城帝に入内した朝原内親王は、祖母に井上内親王、母に酒人内親王といういずれも齋宮となつた皇女の血を引き、自身も齋宮であつた。嵯峨帝に入内した高津内親王は母が坂上田村麻呂の同母妹であり、淳和帝に入内した高志内親王は母が皇后藤原乙牟漏であり、皇后腹の第一皇女であつた。

(19) 俊蔭の母が嵯峨院姉妹、俊蔭の妻は一世の源氏、源祐澄の妻は嵯峨院の梅壺更衣腹の皇女、さらには源仲頼の母が「宮」であつたことがわかる。

『うつは物語』女二宮関係略系図



An essay on “Onna-Ichi-no-miya” of Utsuho-monogatari:
The meaning of an Imperial princess's marriage

Ômiya:the first daughter of the emperor Saga married Minamoto-no-Masayori.And Onna-Ichi-no-miya:the first daughter of the emperor Suzaku married Fujiwra-no-Nakatada. Ômiya's mother was the empress of Saga, marriage of The daughter of the empress is rare. Onna-Ichi-no-miya's mother is Jijuden-no-Nyogo. The emperor Suzaku had many daughters, but loved only Onna-Ichi-no-miya. So, she is an important imperial princess for the emperor Suzaku.

Marriage of these two princesses was modeled after those who in reality governed the country in regency. But there are many differences between the fictitious and the real marriage of princess. The marriage of Imperial princess in Utsuho-monogatari had some important meaning against the history. And when the Emperor allowed his subjects to marriage his daughters,these subjects were approved very valuable persons for the Emperor.

a subject; a vassal; a retainer

Keywords 【Utsuho-monogatari, Imperial princess, princess's marriage,
the first daughter of the emperor, Ômiya】